WASON

Aug. 1903
No. 520

明治三十六年八月二十五日發兌（毎月二回 十日廿五日）
明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可

女學雜誌

第五百二十號

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第五百二十號目次

◎社説
文相論
生活難

◎隨感
楽る者は享け、死する者は生く◎我、驍勇の婬兒なる哉◎萬古の偶友◎科學者の孤獨◎尊とき科學者◎何んぞ無雜作なる◎夏の朝た夕べ

◎女學
繼母の地位(二)
夏の料理(生間正起)
我等叢園(森兒逸人)

◎光瀾之觀
記録……新井奥邃

◎雜録
日本の古代彫刻……青柳有美
花子のなげき……故中島湘煙女史
鬪の陸……大塚楠緒
ゲーテとカーライル……新渡戸稲造君

◎時事

第五百十九號(八月十日)目次

◎社説 日本教育の猶豫事、檄して同感同憂の人士に寄す、靜平たる山林
◎隨感 鎮守の森◎我を捨ての人世觀◎人世僥倖なし◎商道◎白雲の郷◎唯ひとり侶たれ
◎女學 繼母の地位、料理類株の道(生間正起)
◎光瀾の觀 理想の男子(三) 記録(新井奥邃)
◎雜録 花子のなげき(上)(故中島湘煙女史)舍監の四ヶ月(青柳有美)ゲーテとカーライル(新渡戸稲造)定見深睡録、痴情偶語(一愛讀者投)宇宙と人生及靈魂に就て(黒岩周六君)
◎寄書 雄辯の世再び來れり◎雄辯の基礎◎基督教の公認◎佛教一進化せり◎神道界は奈何ん◎當年の宗教家懇談會◎三教一家

第五百十八號(七月廿五日)目次

◎社説 無意識論(無我、無心、無念、無想、自得、大悟、至誠、及び神に入り妙に達するの境界◎武術流行の機運(女學校の薙刀科)
◎隨感 執拗き暑さ◎一陣の清風◎夕ぐれの凱旋◎拂曉戰鬪の準備◎道の案内◎源平盛衰◎小松殿の苦衷
◎女學 文明風家庭の破壊◎故齋藤冬子の日記文
◎光瀾之觀 記録(奥邃)不我の言(一、二)。◎
◎雜録 排女役者(有美)◎田舍(黒光)◎陣言新嘯(鷗村)◎迫懐(柳子)◎東山老翁の勝游舟談◎小言凡語(有美)◎獨嘯録(無美)
◎時事 夏休中の女學生◎成功のおしへ◎信用の代現◎樂しき旅行◎洋樂の流行◎避暑のあそび
◎寄書 堪らぬめぐみ(信陽一女)

期日	前金	廣告料	送金
毎月二回(十日、二十五日)發行す	壹冊定價 拾錢 半年分前金 壹圓 一年分同 貳圓拾錢 代金は總して前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事 但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ實に不本意乍ら計算の煩はしき不得止右樣仕候間かねて御承知被下度候	一行(十七字詰)一回 前金拾錢 一段 同 三圓半 一頁(三段) 同 九圓	送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割増にて計算せられたし

大賣捌
東京 東京堂
西京 勉強堂
大阪 文潤堂

明治三十六年八月廿五日印刷
明治三十六年八月廿五日發行

發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
發行所 東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地 女學雜誌社 (特電番町千一番)
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍 (電話新橋十八番)

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第五百貳拾號

明治三十六年八月廿五日發兌

社説

文相論

昔しは、側用人、奉行、敎授の三職と云ひ、支那に、宮中、府中、學政の一致と云ふ。今や別れて箇々三となり、名けて、內大臣、總理大臣、及び文部大臣と云ふ。

惟ふに此の三者決して偏廢すべからず。若し其一を欠て足らざる所あらば、王道決して隆なる可らざる也。

甚はだしき哉、方今、文相の輕んぜらるゝこと。人の見て之を重しとせざるのみならず、當局の人亦た自から見て重しとせず。既に自から輕んじ、人亦輕んじ、天下皆な輕んず。文相果して斯の如く輕んずべき乎。

若し文相にして、學舍の建築に局促し、課程の增減に拘泥し用書の批判に忙殺せらるゝのみならば、文相の事は、たゞ俗吏の事なり。

若し文相にして、自から修むることなく、而して壯んに虛禮を主張し、自から下ることなく、而して連りに人豪を放逐し、自から理想主張あることなく、而して只だ伴食素餐せば、人之を重んぜんとするも、得んや。

大凡そ、國政の要は、大綱を提ぐるにあり、小目に干涉するを忌む。堯舜より、共和政躰に至る迄、千古不變の大道なり。而して、衆の欲する所ろに於て、衆の能くせざる所を爲し、衆の望む所ろにして、衆に均霑する所を爲し、可成く自治に任じて、可成く高く進化せしむ、是れ大臣の期望にあらずや。而して、幾多大臣の中に於て、其の理想の尤とも高く、其の務めの專ら敎育的なるもの是れ文相にあらずや。

若し夫れ、利害以外に於て、大利大害を案じ、物產工業以外に於て、人の產、人の業を望み、兵器艦船の戰鬪の外に、人性人靈の戰ひを考がへ、國土の風光、山川の粹美、邦民の氣品、人心の趨勢等を題目として、算數以外、現金以外の經綸を案ずるもの、豈に文相にあらずや。文相の任、決して輕き

にあらざる也。

特に、其の職とする所、主として人にあり、而して、其の任ずる所、亦專ぱら人にあり。故に、文相の設備は、朞月にして功を收むると、敢て難しとせず。假令ひ、議會は一錢を增さず、內閣は一令を發せずとも、文相は、其の管內に於て、非凡なる改革を爲し得べし。是れ、今日用ふるに人を得て、月日直ちに大効驗あるの事業なれば也。

若し、今の文相たるものにして、恭謙、士に下り、以て人豪を收攬し、一切之に任じて、一城郭(一校舍)を托し、一藝一道の士を優遇して、其の天才を發揮せしめ。民心を利導し、自由にし、爽快にし、以て萎靡せる國風を振興せば、爲に一錢を費やすとなくして、國利の起ると、億のみならず。而して、之を成すもの、たゞ文相其人の克己復禮にあり。嗚呼、男子生れて、此の危機に立ち、此の要路に任じ、此の重望を負ひ、此の大命を奉ず。今にして斷行せず、何れの日を待たんや。

生活難

餓えて死するものは、野蠻國よりも文明國に多し。十九世紀よりも、二十世紀に多し。日本の東京よりも、英吉利の倫敦に多し。果して然らば、生活難は、減じつゝありや、又は增しつゝありや。

曰く、文明開化と同もに增しつゝあり。近く我國の實例に於て之を觀ずるに、殊に其の太甚はだしきを見る。今や、政海の波瀾より、一家の浮沈に至る迄、總ての叫びは、生活難の爲に由て來らざるは稀なり。今年の整理は、來年の缺乏にして、今月の豫算は、來月の破綻なり。貨幣、煙の如く容易すく消散し、物價、炎の如くたゞ上にのみ騰らんとす。何人も皆な、交際と流行とに不平を訴へて、而も、其の流行と交際との爲に苦心修飾せり。千門萬戸、餘財あるは稀にして、萬戸千門、負債なきは、稀なり。日計足らず、月計足らず、歲計亦足らず。一家足らず、一村足らず、一國亦足らず。嗚呼究極する所、遂に何事ぞや。

翻がへつて、海外の通勢を見るに、此も亦同じく然り。彼等

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の貿易は、驚ろくべく進歩し、彼等の富も亦た稀有なる進歩を爲しつゝあるに拘はらず、其の生活難の酷なるとも、亦前古未曾有ならんとす。

思ふに、是れ滿天下の大勢にして、殊に文明國、文明人士の間に免かれざる通弊なりとす。

而して只だ此の通勢より逸する所ろのものは、支那人のみ、又、支那人流義の日本人のみ。流行にかぶれず、生計を變えず、極めて古風に、甚はだ質實に、多くの當世人よりして時勢に後れたりと言はるゝ所の人士のみ、ひとり此の通弊より免かる。啻に免かるゝのみならず、其支出は概して元の如く其收入は極めて多く、爲に格外の速度を以て、其富を增しつゝあり。此の理、抑そも如何ん。

嗚呼、文化の名を以て奢肆を飾り、衣食を高くして人格の花冠とし、身躰の堅實を軟らめて、衛生と號し、無益に往來して交際と稱す。方今言ふ所ろの文明の如きは、必竟、奴輩の榮華に過ぎず、何の莊高雄麗を見んや。然るに此の虛榮を買はんが爲に、生活に齷齪し、日夕空しく奔走して、遂に人生を消了す。愚も亦甚はだしからずや。

凡そ、人は裸躰の交渉を眞とす。たゞ少しく愼しむ所を表して衣服あるのみ、此の衣服何の修飾を要せんや。たゞ夫、人々特殊の雅趣ありて、風味を吾が衣裳に凝らすは、人生の美術なり。たとひ、食ふに貧しきとも、尙ほ好尙に氣品を失なはざる、尊貴と云つべき也。然るに、一己耐へがたき趣味のよりて、見榮を爲とせば、衣服の好みも亦た醜ならずや。

故によりて斯く裝ほふにあらず、只但だ、浮華虛榮の俗氣に且つ夫れ、天地は一大宮室にして、山河は、猶ほ池庭の如し。此間に逍遙遊する、人の安宅にして、宏壯快濶比すべきなし。たゞ時あつてか、此を小天地に寓し、蘆蝸方丈を結構して、美を座右にちりばめ、寂を筆墨の邊りに粹む、亦一種の風雅なり。然るに、大小一味の感興あるにもあらず、幽邃靈美の好みあるにもあらず、左りとて萬代不易の堅牢を好むにもあらずして、たゞ富を誇るの建築を弄び、坪千百圓の費えを算して人に見せんとす、是も亦た陋ならずや。

若夫れ、食品の事に於ては、生理、風味、同もに誤まれり。今や、人、食物を食ふ乎、食物、はた人を食ふ乎、食物は人の爲め乎、人、食物の爲め乎、殆んど主客を顚倒するの感あ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

り。見よ、如何に衞生論に過敏にして、滋養を取るヿに神經質なるや、今人は、殆んど、其の掛念の爲めに杞憂して悶死せんとする也。昔しは、菜根を食つて百事を爲し、今は、菜食主義を守つて天下に王たるものあり。然るに方今、肉に饑え、飲物に喝きて、之なくんば、死せりと感ずるものあり。此の如くして、憂の爲めに滋養食し、滋養食の爲に亦憂ひ、老子所云ゆる、其の生を衞るヿの厚きによつて死せんとす、亦愚ならずや。

嗚呼、斯の如き煩腦と、斯の如き薄弱と、亦斯の如き迷執とありて、誰か之を文明と云ふや。生活の高きとは、衣食住の高きを言ふにあらず、人生の快樂とは、榮華名聞の奴にあらず。今の如くにして僞而非文明の下郎となり、いよ〱生活に奪つて而していよ〱生活を難くし、朝野、男女、皆な生活難を叫んで、同もに與もに痛哭せんとす、是れ豈に天下の痴態にあらずや。

諸公もし警醒する所あらば、去つて支那人に學べ。近く古老先人の昔し風に學べ。古風、反つて新らしく、支那人反つて郁々乎、夫れ文なるを知らんとする也。

隨感

○棄る者は享け、死する者は活く。

柔善く剛を引き、弱能く強を吾物にす。昔しは聖賢連りに此消息を說法せしに、人々たゞ高尙に聽き做して、人情世評の常識と思はず、大抵敬遠して朝夕實際の覺悟とせざるぞ、殘り惜しけれ。世に於て、自立せざるもの嬰兒に及かず、故に人群がり集まつて之をして立たしむ、世に於て可憐なるもの楚々たる美人に及かず、故に人競つて之を保護す。渠、消極なれば、この積極に引寄せられ、渠、稀薄なれば、この大風は吹寄せ、渠、貧しければ、此富めるもの尤とも流入すと、學者は其の學に於て解かんとすらん。粹士通人は初めより之を察し、老功熟練の翁は一生に經驗し、名將猛卒も篤と辨まふる所あり。但だ夫れ、辨知して之を利用するものは、一時の勝を制し、學知して此敎に服するものは、過まちなきを得るのみ。かの自づからにして然り、我知らずして斯く行なふ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

者が、衆をして爲に死すとも尙ほ辭せざるの思あらしむなれ。嗚呼、自ら棄る人の能く享るや、豐にして又神なる哉。

○我、蠻勇の賤兒なる哉

私なく、我慢なく、意地なき、純清の人を見れば、吾心自づと引付られ、之が爲めに勞しても疲れず、之が爲に役されても尙ほ欣こびつゝ、其折々、自から曲解して言へらく、人の斯くあればこそ我に献牲の心の起るなれ、左なき利己の族の初めより我を利用せんとするものの手に乘るべきかは、斯る輩には一層嚴しく遇して、反つて其の我儘を挫くべきなりと。左れど、つく〴〵と觀省せば、之も亦た利己の說、蠻野の說なり、暴を以て暴に報ゆ、何れの日に聖種を兆さゝんや我冀ふらくは、先づ我が我慢を壓し、我が躰面と面目を押しつぶし、我先づ人心感激の種子を播いて、偏へに他の奴僕とならんずる心の隆ならんことを。我や眞とに蠻勇の賤兒なる哉。

○萬古の尙友

嫉みの心、人みな在れども、感奮の心も亦有り。强ひて暫らくは、反抗すれども、優れたるもの、大ひなるものには、遂

に悅服すること、萬人の通性なり。此をもて、大なる靈性は、より大なる靈性に支配せられ、深き智慧は、より深き智慧に支配せられ、到底、優者の領民たることを廢めざる也。左れば、百年にしてやうやく知己あるも、千年にして初めて門下あるもあれど、所詮其の得たる人格は空しく消ゆることなし。殷鑑周の先にあり、過去千餘年の人の歷史は、裕に此の理はりを示して足れるにあらずや。左れば、人何を恨み、何を悔ゆる省みて、自から偉大高遠に達せざる、唯一の歎きにして、人生此他に如何んの苦慮かあらん。

○科學者の孤獨

我國現代に於て知らるゝことの尤とも少なきは、科學者なるべし。世界にて有數と算せらるゝ我大發見者も、今の新聞紙にすら記載せらるゝこと稀なるぞ多き。此を恨みんほどの其人は取るに足らねど、我同胞の智識としては、遺憾の極みにこそ。豪傑、淸士、美人、歌よみ、夫々天地の秘密を顯現する代表者なれど、科學の一方面にて之を現はす人の從來我國に欠けたる、最大の貧なるべし。既に別天地なり、既に異なり

たる草木昆蟲あり、玆に新たらしき發見の續出して、帝國歷史に一生面を開かんは、科學者の任なり。もし開闢草創の意氣をもて之に當る人の多からんには、帝國新に擴張せりと言つべし。

○尊とき科學者

蜂の巢を小なりとして、國家を大とし、蟷螂の斧を小なりとして、軍艦巨砲を大とし、一葉の脈絡を小なりとして、線路鐵道を大なりとし、もしくは、銀河の星の數を多しとして、孤燈のとぼしのかげを細しとし、地文の屑々に胸つぶれて、色紙の彩どりを淺しとし、大千世界を廣大なりとして、茅屋の内を狹しとし、之に格段なる差別を置いて、價値に增減を附せんとする學士あらば、余は採らず。」蚊のうなり、蠅の翼蚯蚓の動き、豆の大きさ、カボチヤの花などに一生を托せんとするも、極めて偉大なるとと知れども、其研究の統率的ならず、其着眼の帝王的ならず、機を失し、勢を失し、注心點を失し、抱括一統の趣味と、人格とを欠く科學者の研究は、余重しとせず。」やゝともすれば、人生、而も、社會といへる

最と小さき俗なる人生に對する實用に拘泥し、速かに其の研究を錢に代んとする科學者は、余が淺しとする所なれども、凡そ科學界の豪傑の爲す所は、亦自から此般の副產物を殘し、容易く人生を益せずんばある可らず」。其發見したる理に身を徇じ、之を道として實行し、單に其の智見のみならず、人格と感情とを之に同化せしめて悠々たる科學者こそ、わが景慕して止まざるものなれ。

○何んぞ無雜作なる

山淺くして仙人乏しく、水淺くして蛟龍住まず。大嶺聳えざれば、天に遠く、富岳は極めて平板にして、何人にも自由に登り近づかしむ。烈々たる噴火口は、大抵休息し、廣き原野は、開拓せられ、巨木は伐られ、日光の通らぬ深林は無し。人、大抵は交際的にして、一言すれば臟腑の多少を見めす。新建築は間に合せにして、舊建築は毀れつゝあり。城は陷いり、堀は埋められ、到る所ろに、ペンキの塗らるゝと、剝げゆくとを見る。汽車の煙、無益に黑くして低く、田舍の白き煙の高く登るを見ず。鷄は鳴かざる前に、雛のまゝに殺食

せられ、犬は吠えずして愛さるると稀に、たゞ〳〵吠えつつあり。竹籬は、絶壁に變りたれど、家に深閨なく、電光連りに紙に映じて、暗き庵室を見ず。演說を聞て、沈默を見ず、辯護多くして、獨斷なし。嗚呼、夏よ、夏よ、何んぞ更に更に酷烈ならざる。流汗、瀧の如くなれ、皮膚漆の如くなれ。われは暑を避くるものにあらず。秋風、既に來れる乎。左らば、汝の悲哀と、汝の落葉と、汝の慘たる月光と、汝の孤雁の歎きとをして、極めて痛ならしめよ。余は近時の手取早きとに厭き果てたり。

○夏の朝た夕べ

土泥の中より蓮華出て花開く、汚濁の下に美くしきものありけり。夙朝、牽牛の星に戀ひて別離の顏ばせ露を落す、人の見ぬうちにも朝の榮えはあり。胡蝶、幾遷轉、蜻蛉、幾昇降無常流轉に似せて、人生の趣むきあり、日中、熱に懲りて、日暮、涼を迎へ、夜半、冷を恐れて、早天、光を樂しむ。仰いで望めば、月光黑雲を劃つて、高遠の奧の輝やきを漏らし星辰の羅列する所、天工の我を包んで環視するを覺ゆ。

女學

繼母の地位（下）

繼母惡しきにあらず、繼子惡しきにあらず、亭主惡しきにあらず、出入のもの惡しきにあらず。左らば、何ものが惡しきぞ。たゞ、運の惡しき也。

然り、運が惡しきのみ。左れど、惡しき運も、運り來れば致し方なし。禍福、綯なふ索の如く、塞翁の馬、乘るも下りるも、人生の途行なれば、如何なる不運にも其の心得と云ふものはあり。もし能く其の心得に覺悟して、眼前當適の處置を施こさんには、禍を減じて福の種を播くと難きにあらず。人や、絕望する事なくして、光明の輝らす所ろに注視せずんばある可らず。

前號記載の如く、事の行違ひは惣て惡運より出で、人々互ひに疑念邪推するより大衝突を引起すとなれば、誰も〳〵其のありがちの筋道を覺悟し、豫かじめ、誤解の種を播かぬ樣に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

するが、第一の心得なれども、左りとて、子供は頑是なければ、かゝる心得の出來べき筈なし。然らば、出入のもの、及び親類縁者の人々は如何にと云ふに、之また多數にして、一々調のへがたし、其の惣てが悉皆良好ならんとは、所詮、望むべからざる也。

故に、さしあたりの責任は、繼母と、其良人との、二人者の上に落ちかゝるべし。此の二人の間柄は、伉儷にして、如何とも談しがつくべし。其地位は、父たり母たりて、最上の責めを負へり。其數はたゞ二人にして、疎通、納得に、面倒はなし。左らば、繼子問題の大困難に對して、其災を去るべき當局者は、主として、此の二人にありと言ふも異論はなかるべし。

由て、審らかに、此の二人が心中を忖るに、彼等が人知れず衷ひに懷く深情は、大抵左の如くなるべし。

其の良人は惟へらく、我冷淡にすれば、我子は自然に母になつくべし。我もし、妻に小言を言はゞ、我子のヒイキすると誤解すべし、然し乍ら、たゞ餘りに任せ置ても、人の見る目、前妻が縁者の見る目も氣遣はし。暫らく、我子を他所に預けんか、妻の面目を傷つくるに似たり。

渠、斯の類の迷路に立ち、樣々に思案して彌よ惑ひ、種々に工風して益す誤まる。其の天眞を失すると甚しきにつれ、其の細工を爲すと多きにつれ、家門の衝突ます／＼酷なり。妻は斷えず不平らしく、子はいつも、ヲヂ／＼し、一句一言、薄氷を踏むの心地して、何時如何なる大珍事を引起さんかも知れず、先妻の命日は、忘れたる如くして經過せしめ、其の墓に參るとも自づから遠ざかり、其の逸話懷舊談のすべて禁物なるのみならず、凡そ、マヽ母、マヽ子と云ふ、マヽの一句は、たとひ御飯に關してさへ必らず口外せぬ程に遠慮するに至るならん。

之に反し、繼母の心中は如何ん、

渠も亦た惟へらく、叱らば性惡ると思ふべし、甘やかさば躾なしと思はるべし。質素にすれば物惜しみと思ふべし、華美にすれば他人行儀と思はるべし。どれ程にしても、紙一枚の隔ての取れぬは、誰か蔭にて言きかす人のあるべし。吾夫のことさら彼に冷淡にせらるゝは、妾に御遠慮あ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

りてなるべし、隔て玉ふ御事かな。他所にて何とうわさする、すべて打あけ玉はぬぞ、なさけなし。妾には何の隔意もせざるに、誰も〳〵、遂にはわが郎君まで、妾を繼母として扱かひ玉ふぞ心苦しき。孤島にたゞ一人、此身のみ棄られて打あけん人もあらず。

既に其の良人に對してすら不平あり、他の一切の人の顏は、何とやらん吾を批評し、疑察し、探偵するが如くに見ゆ。元と無邪氣なりし我兒も、追々他人の捕虜となり、後には間者となり、有る事無き事、他に出でゝ吹聽し、母の迷惑不名譽に頓着せず、家に居れば少しも腰が落付かず、一刻も早く外に出行んとす。嗚呼、婦人生れて人の妻となる勿れ、特に取わけ、人の後妻となる勿れとは、繼母が、袖をかみ、衾を破りての怨恨ならん。

悲しき哉、人生。何等の矛盾ぞ。既に妻を失なひたる男子、其子の爲めに後妻を迎ふ。後妻よく勸辨して嫁ぎ、人の子を我子として愛撫せまくす。子や、母を失なつて復た母を得たり母を得たるうれしさは、兒心の夢中にも倘ほ欣こぶ所なり。惟ふに、草葉の蔭の哀れなる婦人は、現世の執着にて誤解す

る迷ひもなし、恐らく眞相を看破するは、たゞ此の婦人一人なるべし。彼女は、郎君が新しき慰藉を得たるを喜こび、愛兒が代りの母に抱かるゝに感謝して、柳の下、墳の後ろに、涙を落して喜こぶならん。然るに、生ける人間の煩腦や、すべて萬事を顚倒し、一切の事矛盾して、彼我同もに意外の悲慘を持ち來す。それ誰に向つて其の過まちを問はんや。

語ばを寄す。父と母よ。御身等先づ覺悟して、此の禍根を斷ち、人生不思議の緣に結ばれたる誼みを固くして、以て人間最上の悲慘を去らざる可らず。

就ては、彼等父母の心得らるべきとあり。彼等、此の心得を欠くによつて、其の災を增す。もし過まちを問はゞ、則はち此の修養なきの故と斷言せざるべからず。

其の心得べきとや、如何ん。曰く、彼等が自から信ぜざると彼等が先づ自から疑ふと、此の二箇の病毒をして決して自個の心中に兆さしむる勿れ、是れ也。

夫れ、人は、自から疑がつて後ち、人の疑ひ入り、自から信ぜずして後ち、人の不信來る。たとへば、腹に一パイの氣を充せば、寒に冐さるゝともなく。斷じて病に感ぜずと思へば

流行病をすら惹るゝとあり。自個の心に欠所を生ずると、即はち、百病の基ゐ、又千廢の初め也。去年死したる高橋泥舟居士の槍に關して、曾て記載したるとあり、曰く、

余の少き時や、山岡鐵舟と同もに、大の破佛家なりき。佛法を嫌へるにはあらず、破戒の僧多きを嫌へる也。然るに一日、某氏を訪へる折、先じて一僧の來り話するを見、早朝より忌はしきとに出で會ふもの哉と、腹立しさに歸らんとせしが引留められ、本意ならずも渠と同席したり。嚴然冷然として構ひ付けぬに、渠は徂々しく近づき、扨は、高橋先生かな、好き所ろにて、御意得たり、某は、林瑞と申すもの、夙に拜顏を得んとを願ひたりと言ひけり。抑も、傳通院内の林瑞は、一種氣節あるの僧にして、屢ば德川氏の爲に忠言を吐く、久しく名を聞きて賴母しくは思ひしが左りとて、好ましからぬ僧侶のうちとて、善くも會釋せざるに、渠、更に申すやう、かねてより先生の御槍術は世を擧つて歎美いたす所、殊には特得發明の御術もあるよし承はり、一度は拜見の榮を得たく懇願せり、許さるべうにやと問ふ。扨ても、坊守の身として大言を吐くもの哉、一拳

骨を與へくれんと存じて、毫も差支へなし、何時にても御出あれと言ひて別れたり。翌早朝、取次のもの怪しんで申す、一僧來りて御稽古を拜見せんと願ふと。則はち、渠なりとて、直ちに道場にて待たせ、時來りて出場し、單身、諸門弟を合手に朝より午迄、間斷なく引受たり、僧は凝然として一瞬もせず、同じく見つめたり。夏の央ばとて、流るゝ汗は、瀧の如し。面を脫して、林瑞に向ひ、如何に御覧ありしやと言へば、僧は數度嗟歎し、さて〳〵、聞しに優る御熟練、驚き入るの外候はずと對ふ。此は生意氣の申條僧侶の分際に、何、槍術の分かるべきと激し。然らば、如何なる所に、左程感服せられしぞと問ふとき。渠の言ふ、まとに是れ『今す少し』と言ふべき所にて候半と言ふ。無禮至極と直ちに一撃せんとせしが、翻つて顧れば、吾より尙ほ迅り氣の壯士多し、余もし一撃せば、彼等は之を打殺すに至らん、道場にて僧を殺すは面白からずと、强ひて忍び、書院に案內して、かの一言を詰る。林瑞、再たび、嗟歎して、實に先生が、道場に突立ち玉へる御有樣を善く見れば、釋尊が立ち王ひし時も恐らくは此外には出でじと見

受けられ候。然し、此は私より承はらんと存せしものなり、先生に向ふ諸門弟が一々引退るの時、即はち最後に至つて、一刹那、不思議にも變はらせらるゝは、アレは、何事にて候、何故にて候と、反問せり。霹靂一聲、天外落下の此の問ひは、胸を突つ通せり。意はず、叩頭一番、陳謝して曰く、噫、其一言こそ、無上の師範なり。己れ、四方を周遊して一人の敵に出あはず、槍に於ては、天下第一と深く自ら許して、師なきことを憾めり、昨日來、貴僧に拳骨を加へんとし、只今は殊更此處に案內せり、先以て此の惡念を洗ひ、罪を謝し、而して、謹んで敎を乞はん。眞とや、某が懼れたるもの兄一人の外候はず、兄は不思議なる槍の達人にてありき。然るに、兄短命にして身まかりし後は、余が槍の面に立んもの、天狗にあれ、夜叉にあれ、突伏せられぬものあるべくやと固く信じ居れり。道場にて、諸門弟が幾本の槍は物の數ならず、御覽の如く、引受くるに何の雜作もなけれど、彼等が引退る都度〳〵、心中常に一つの感を起し候。そは、斯迄の余が殊練は、試藝の故にてはあらざる乎、もしや眞身の槍、秋の篠の如く眼前に顯はれ出でん時にても、尙能く斯の如きを得べきやと。此の一疑案、念頭に浮び、常に最後に至つて惑ふ所ろありと白狀せり。林瑞、首肯て左こそ座はすべけれ。然し乍ら、一本の稽古槍を提さげてすら斯の如し、眞槍を用ひて、眞戰に臨まば、更に一層なり、と思ひ玉はんこそ當然なるべけれど、左樣に確信せらるゝに至るは、今一段の御熟練を要するなりと斷案せり。(「日本宗教」第一號)

見よ。自から疑ふ、是れ敗の初。自から信ずる、是れ勝の根柢なることを。

故に告ぐ、繼母と、其の良人たるものよ。公等先づ遠慮すること、氣兼することを止めよ。「繼母なれば」と自から卑下することを止め、父は「繼母なれば」と、之を區別することを止めよ。

繼母なるものよ、固く心に信ずべし。此の子の母は、天下に於て今ま唯だ吾一人なり。吾の如く、母として此子を愛するもの他に一人もなし。母として此の子を愛するほど愛するものは、外に一人もなし。世間何等の評ありとも、ソは他人の評にして、他人の世話なり。他人は決して母に及ぶものにあ

らず」と。
良人たるものよ、妻が此の決心を壯とし、其の信仰を美なりとし、眞とや、吾が子の母は此の外になく、吾が妻は、彼の外になし、たとひ何等の善き注意忠告あるとも、他人の暫時の批判は、終生の母たるもの丶信切に及ぶ可らずと。則はち毫も之を繼母として見ず、毫も之を後妻として見ず。故に、其子に關して言ふべきヿあらば、遠慮なく言ふべし。怒るべきヿあらば、遠慮なく怒るべし、其の意味を誤解せらると心配する勿れ、爲めに子供の上に惡し丶と掛念する勿れ、眞の妻とし母として眞に待遇するに當り、安くんぞ、此の介意隔心を許さん。もし我に此の介隔あらば、災を引起すものは、則はち我なりと心得べし。
夫れ、父たり、母たるものに於て先づ此の確信あらば、其子は、確乎たる土臺の上に立ちて、双方に介することなかるべし。出入と親族と、久しからずして、口を唫むべし、もし唫まざるとも、顧慮すべき價値はなかるべし。此に於てか、一門萬全にして、其子はノビ〳〵として育つべき也。

我薔薇園

森驟逸人

培養が容易くて、花が絶えず開き、然も其色に種々の變化があつて、香氣の強きものは、則ち薔薇花にて、素人の培養する花卉としては、理想的と云ふても宜しかるべし。我が薔薇園は僅に三坪位なれども、何れ程樂みであるか分らない。此て、三度引越をなし、東京から仙臺、仙臺から横須賀と、住宅を移すけれども、何時でも新に薔薇園を開始する。開始するときは、全然若木より始むるなれど、其生長が、又極て興味のあるものである。薔薇の培養は、素人に取て極て容易で植木屋よりも反て良く花を開かせるヿが出來る。唯之を愛し勞つてやる計りである。であるから、花が落ちたから、夫れて放り出すと云ふてなく、直に後肥料を施して、前より尚一層盛に、生長開花せしむるのである。薔薇の花は、二千年前希臘の時代から、花の女王と云れて居るが、此名稱は、今日ても失なはないのみか、培養術の進歩の爲に、益々世人から愛せらる丶のである。西洋では、毎年六七月頃に、薔薇會と云ふがあつて、新花や培養の結果を競ふのである。其賞與とし

て、金牌や銀盃を出す。新花の栽培は、重に黒人筋のする事であるが、完全に開かせた花を出品するのは、重に素人である。私も非常に薔薇が好であるから、追に年を取て、躰が利かなくなり、御國の爲に仕事が出來なくなつたら、專門に薔薇園の主人にでもならうかと、思ふこともあるが、日〻に丹精の結果美事に開いた花を切賣りしたり、芽を出し、蕾の付たものを、むざ〱他人に賣り飛ばすことが出來やうか。然も、大概の人は、花が散れば、植木鉢は干からんぼしにして、此花の女王を飢えさせ、渴へさせ、又は凍死せしむるかと思へば、とても專門家にはなれさうもない。

薔薇の培養は、實に好心持のものである。少〻惡るかつたと思ふことをしても、小言も言はず、不平も云はず、然ふして注意してやれば、良く其親切をアップレシエートして、雨に濡れ、日に照り付らるゝをも厭はず、立派な花を開いて呉れる。僅に三坪の園ではあるが、之に三十位の種類を栽植し、朝起た時、晩に御役所から歸た時、一廻はりして、其生長の有樣を見たり、虫が居れば指で彈飛ばして、蟻に食せる、又時に肥料を遣たり、今日此頃の樣な熱する日には行水後の溫き水をやる、之は薔薇に取ては晩酌の一杯よりも有難いに違ない。一年朝顏の培養をやつて見たが、薔薇の方が何の位仕事が少くて、結果が良いか分らない。今に濃久會の樣な薔薇會が出來るだらうと思ふ。

薔薇に良き地位は、少し小高き所で、南又は西向の庭である又地質は、少し砂雜りて、黑質の肥料に富んだものが良い。然し、水拔の良のが非常に大切な事である。先づ薔薇を植ゑやうと思ふなら、地面を掘返して、ふわ〱にさせ其側を歩かぬ樣になし、五寸四方位の穴を掘りて其内に古き下肥か、又は充分腐敗した塵芥を入れ、其上に土を載て置き、夫れからばら新發行の目錄を取寄て、其中から撰出して、注文する。すると、二三日にて、箱入小包便で送て來るから、其藁をとき、根を四方に廣て、先の穴に植ゑ、根は水平に廣げて、肥料と接せぬ樣、其上に並て土をかけ、風の爲に木の動かぬ樣に、可なり堅く植付て、水をやり、炎暑ならば、日除として葉の付た木の枝を、其圍はりに揷すのである。植ゑる時は、元から付て居る葉を成るべく取らぬ樣にするがよい。葉を取ると、根の生し方や、芽の出方が、惡い。それから、二週間

乃至一月經て、芽が出て其新葉が青くなる迄に、肥料はやらぬが良い。肥料には、人造固形のものもあるが、之を用ふるときは、根の上で、幹より五寸位の處に、圓く盛上て置く。すると、雨や露で、之が腐敗して、其水が追に根の方へ浸みると、始めて有効のものになるのである。然し、下肥に越した肥料はない。之を水に等分にして、二月以上蓄て置き、花の散て其莖を切斷すると、直に充分やる樣にすると、結果は實に良いのである。然し、普通の處で、此下肥を得るとは六箇敷から、女中の外雪隠のある所をは、之を蓄貯所に代用するのも宜しい。總じて、下肥又は液肥を施すに雨の後の晴天が宜いけれども、晴天續きの日ならば、一度水を遣て、濕ひを付け、其後に施すが宜しい。

薔薇の花には、上を向て開くのもあるが其重みの爲に、下を向くのもある。此樣なる花には、鐵の張金で支柱を作り、之を上方に向させるともある。又中には、日に照付らるゝと、花の外瓣が燒て、褐色になるのもあるし、雨に濡れると、蕾の儘腐敗して開かぬのもある。此樣なのは、黄色の花に多く概して、萬重大々輪のものに多い。此等に日除け雨除の必要があつて、面倒ではあるが良く開くときは、夫丈け見事である。日光の盛なるときには、黄色の花は、白色に變じ、白色の花は紅色を帶る。前に云ふとを忘れたが、肥料の結果は、液肥のものでも、一ヶ月半乃至二ヶ月立たなければ現はれぬ之れは根が吸收して、生長し、夫れから芽が出て、枝が延び花が顯はるゝのである。西洋では、半スタンダード形又はスタンダード形と云ふて、二尺乃至四尺位の野薔薇の枝に接芽するものである。之は庭園に植て見榮のあるものである。公園の花壇などは之でなくてはならぬ。日本では、鉢植が好きだから、皆んな根の處に接木する。此れでも、栽培方によつては、半スタンダード形にするとも出來る。日本の植木屋は接芽と云ふとが出來ぬソーダ。但し、横濱の植木商會では、やつて居るらしい。

西洋では、元薇薔の新花を出すには、一の花粉と他の雌蕋との交接を自然の風や虫に任せたものだが、英國では、最つと嚴確な方法で、雜種新花を得て居る。雜交に依て得た種子を地に蒔き、之が生長して、極々細き木となるときは、直に之を野薇薔に接いで、早く新花を開かせるのである。薔薇の或

る種類は、揷木でも繁殖するが、根が小さくして、生長も開花も悪い故に、何んな薔薇でも、接芽又は接木に依て、増殖するのである。抑薔薇の今日の盛況を致したる元は、佛國ジヨセフイン皇后の奬勵に基たものであるが、今日は、英國が最も盛んなのである。英國の氣候は、最も薔薇の栽培に適するからである。日本では、英國風に新花製作をして居らぬと思ふ。大概は外國輸入品と、風虫偶然の雜交に依たものであろー。西洋には、種々有益な薇薔書があつて、中には名種名木に就て、其性情、從つて又栽培法を書載たものがある。然し、之を日本にて實行し樣と云ふと、西洋名と日本名の間にアイデンチヽーを見出すとが出來ないから、困たものである

次に二三種のものに付て、一言して見よう。

天地開。之れは西洋で、ラ、フランス(佛蘭西國)と云ふ薔薇て、千八百六十七年に、佛國栽培家ギヨー氏が、風虫の媒介に依て、偶然得たものである。此木は、中に强健で、花も絕えず開き、大々輪と云ふべきもので、然も花は直立して居る。盛夏の時の花は薄時色にして、麝香の香强けれども、春秋の花は、表は白、裏は紅で、其紅が表の白に少しく透通りて、香もずつと意氣なものである。花の形は、完全な圓形て、中心の花瓣凸出して、實に見事なものである。ラ、フランスと云ふ名は實に冝く、花の品質を表はし得たもので、薔薇家は、此名は、インスピレーシヨンに依て得たものだと、言ひ做し居る。生長も、至極宜いけれども、葉は少しく弱く時によると、赤點を生じ易し。庭園に、何十本あつても、宜しい種類なり。生長は横に擴がらずして、竪に延び、枝は長く出ないで、簇生する方である。

陽臺夢。之れは、西洋で、ポール、ネーロン、と云ふもので千八百六十九年、ルベー氏の得たものである。生長の狀は、箒に類似し、年三回位、開花する。其花は、桃色單樣にして香もなく、味もなく、實につまらない花だけれども、其大きさは、非常のもので、薔薇中の最大花ならん。葉も亦大いけれども、少し古き葉は、赤點充滿して、見るに堪へない。庭園の中央に植うべからざる種類である。

大山吹。之れは西洋で、マレシヤル、ニール、と云ひ、千八百六十四年に、ブラデル氏の得たる蔓性物である。細長き枝が一年經てば、之より出る枝に花を開く、其花は、眞黃異大

萬重莊麗にして、今日でも黄色薔薇の最上の位置を失はない。然し此花は、日にも雨にも弱く、日に當れば外邊の花瓣は凋燒し、内部の色も白んで、面白くない。黄の司も、同種類で、同一の弱點がある。但し葉は大山吹の方が遙に見事である、大山吹の弱點は、其接木點に於て、結核の有様を呈するとて、他種には餘りないとてある。

金光殿　之れは、西洋で、マリー、フハン、ハウト、と云ひ千八百七十一年出のものである。强健で、四時絶えず開花す。夫故又絶えず肥料を施す必要がある。其花は、千重大輪と云ふべきもので、本來は帶黄白色なれども、蕾の外部は紅色をして、花も開いて、後一二日經れば、次第に花瓣の先に紅色を生し、花の散る一日程前となれは、花の内部は眞黄色となり、其周圍は紅色となり、實に美麗である。葉も亦大形壯麗にして、生長は太き頑狀な條を生ずる種類に屬し、蔓性てはなく、純粹の茶種と稱するものである。各園に必ず一本なくてはならぬものである。

夏の料理

生間正起

○煮凝り

魚類の煮汁へ寒天を少し投じて煮たる後ち冷却すれば凍凝す之を煮凝りといふ夏日に用ゆる調理の一なり左に大凝菜の製法及仕用法を述んに。

大凝菜一に凍瓊脂といふ萬治年號の頃歸化の僧隱元なるもの之に寒天の稱を下せしより擧世之を寒天と呼ぶ之を製するには海草、石花菜に江籬といふ海草を混和して能く舂き乾燥し置き嚴寒の候に及びて之を熱湯にて煮熟溶解し寒天に晒して凝結せしむるより寒天と名付けたるものなり寒天に角寒天細寒天の二種あれども細寒天は職工用に供するものにして張物屋の如きは尤も多く使用す一に之を流蘇寒天といふ食用には角寒天を用ゆべし角寒天一本に水三四合の割合を以て水を煮沸し寒天を細かに毟り入れて攪拌しつゝ溶解せしめ目の細かなる毛篩斗にて重箱の如きものゝ内へ濾過し入れ水にて冷却すれば凍凝す之を細切筒へ入れ突き出し或は細かに切りて砂糖

又は酢にて食ふも蘗汁に投じて煮るも佳し其の凍凝せしめざる溶液を魚類の煮汁へ投じて冷却すれば煮凝りとなるなり。

○冷　汁

よき溜油に極上の薄口醤油と酒少々さしてかるくうまく鹽梅すべし鹽梅したる後ち器に入れて水にてよく冷し左記の品をそれ〳〵に入れ出すべし夏日の汁に妙なり

魚類なれば霰浮　これは鱧抔の摺身を板に延して細かに縦横に切り汁に投じたるをいふ

花烏賊、其他薄燒玉子の類

精進物なれば　淺草海艸の類を能く火取りて、茗荷は小口より薄く刻むべし

蓼、紫蘇の類なれば眞砂子に切るべし

汁の具は右の品類又は其の他の品を用うるも胡椒、唐がらしおろし蘿蔔の類を小皿などに盛て出すべし蘿蔔はからみ蘿蔔がよし。

光獨一之觀

記　録

奥　遂

書簡。その益々開發進達して、啻に其中に塞つるのみならず又更に強剛なる表外に出て昇らんことを冀ふ。

成程、實際、當地には眞の呼吸に供すべき空氣も之れ有るなければ、其地と雖も格別清潔なる空氣のある筈もなかるべし太陽とか日輪とかとも稱さるべき諸々の高明界に在ては皆宇宙一家天球一人と云ふ主義にてあれば、まさか、二家とまでも分離する程の人類はなかるべし、若し或は誤つて一小僧の生きたる頭髮の一本をも引き拔かるれば、神樣の頭が矢張り痛く感ぜらる。

豚犬世界の外は凡て皆な一家たり、但し其一家たる中に無數無限の第宅宮城のあることを忘るる勿れ、蓋し神國は眞のホームなり、快樂の道充たざる所無し、而して秘密を守ることに至ては此より嚴なるはなし、故に彼に於て開闢放任なるや

其秘密に關しては此世の閉城鎖門せるものよりも更に甚だ嚴なりと謂ふ。神と其人との外は絕て知る能はざる者有るを謂ふ。

○笑へば肥ると云ふ言葉あり、然れとも哲人は云く、善く笑へば則ち神聖に進むと。

來書に云く、「此は予の眞面目に向つて何等の價をも增減するものならず、思ふに此れ欺僞哲學の敎ふる所、何ぞ復た神聖を口にして更に其欺僞の罪を增大にするや、笑ふも笑はざるも予に於て何の干するあるなし、乞ふ予に永しなへの神の愛を掬せしめよ、今や予は渴し盡せり」と、敢て問ふ、誰れ欺僞哲學を以て如此く敎へし者あるや、夫れ何言にても、默せざれば之を口にするものなり、焉んぞ神聖を口にするを以て一概に之を咎むるを得ん、且つ君既に「何の干するあるなし」と斷言すれば則ち斷決實に決す、復た何の餘地の講ずべきあらん。既に餘地なければ、探究も亦自ら究盡せりと謂はざるべからず。唯だ、今ま君は、渴し盡せりと自言す、然とも君若し躍つて自ら活水たる笑源に汲まずんば、天地廣しと雖も孰れか其渴を癒すを得んや。抑も人假令ひ自ら天顏より背くも獨り至尊至愛の神笑を如何んせん、日月若し笑はずんば萬物何を以て呼吸するを得ん、クライスト若し笑はずんば兒童何を以て其國に遊ぶを得んや、天使若し高く笑はずんば軍人何を以てか勝を制せん、父母若し笑はずんば家庭何を以てか其勞に耐へんや。但し笑に眞笑あり、僞笑あり、善笑あり、醜笑あり、或は以て身を滅ぼすあり、或は以て病を癒す有り以て罪惡に陷るの笑あり、以て魔魂を壓伏するの笑有り、夫れ笑も亦類多し、哲人は人の或は之を區別する能はざるを恐れて、懇に之に冠するに「善」と云ふを以てして其惡笑愚笑とは正反なる笑たるを示せり、然に深く其意の在る所を究めず妄斷して之を欺僞と謂ふ、世俗自ら好んて苦悶すと雖も、其れ何んぞ大人の悅樂に傷せん、迫害に由て困めらる者は天地共に感ず、自ら好んて苦悶する者、大人之を笑ふ。

來書「予は死するまても此苦悶をつゞくるの止むを得ざるべきを想ふ、苦悶のみは予に生命の樂を供するを知ればなり、然しながら苦悶は生命に入るの道にもあらず、笑もまた其道にあらず」と、此言は然る點に於て然り、死するまでもの「も」の字は既に無用、何となれば苦悶して止まざれば、必ず

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

間違なく死に至るものなればなり、クライストの來りしは我儕をして死に這入て斃れしむる爲に非ず、之と正反、死より救ふて生命に入れる爲めなり、而して生命は何ぞや、萬笑永樂、善を極めて美を盡さざるなき者也、是れ生命也、是れクライスト也、是れ復活して永遠不滅なる肉體肉腦肉心肉情を完有せる貴神クライスト耶蘇也、即ち父也、母也、惟一全能の貴神也、若し此を外にしてクライストなる者有りとせば、余は其を是認するものならず、神我れを天堂へ引かば天に昇るべし、地獄へ落さば喜んで彼に下るべし、唯だ余は必ず人の身靈をして凍凝苦滅せしむる夫の世の耶蘇等には從ふものにあらざるなり。

來書「苦悶せる予に神密に告げて、汝憐むべきものよ、歎く勿れと言はる」と、此れは即ち萬笑永樂の聲なり。

「肉のライフを去る云々」、然り、只だ、肉の何たるを知るべし、惡肉は惡、善肉は善、舊肉は舊、新肉は新、死肉は死、生命の肉は生命、初生の肉は初生、復活の肉は復活、クライストの肉はクライストと、其新生を受くれば、人の肉體も亦た復活なる肉體となる。

末に「嗤笑せよ、呵責せよ、死亡せしめよ、予が身猶ほ此等の一つだに價せずば、乞へらくは予をば雷火に投ぜくれん事を」と、此は猶ほ所謂華嚴の瀧に投じてくれと言ふか如し、醒耶、夢耶。

要之、一小指のみを以て總身全體の作用を論ぜんとするは無用なり、無限に重複なる道を學ぶに最單純の一小點を以て自ら限らば、豈に終に之を覺るを得べけんや。萬病萬差、善醫は人を以て人を治す、該症の如きは天笑に於て善笑するに如くはなきなり。

雜録

日本の古彫刻

青柳有美

日本の古彫刻は力の權化なり
運慶の作は力を浮動するのみ
天下の最名作は戒壇堂の毘沙門天と長目天となり
行基弘法の作は覇氣に富み惠心の作のみ獨り圓滿なり定〃の作は未成品にして定慶に劣る
日本の古彫刻は腹部以下を無視す

山城大和のほとりに巡遊して、其博物館を見舞ひ、其古寺舊祉を、おとなひて、古彫刻の著しきものを觀賞せる人は、ま

づ其作物の單調なるに驚くべし。即ち興福寺に至りて觀るところも、十二天なれば、卅三間堂に至りて觀るべきものも、又十二天なり。藥師寺と奈良博物館とに十二神將あれば、京都博物館にも又同じく十二神將あり。此處にて眼に入るものも金剛力士なれば、彼處にて眼に觸るゝものも、又金剛力士なり。此くの如きは、思想の單調にして複雜ならざる時代に當りて、素より免れ難き弊たるに相違なく、かの古き希臘の彫刻の如き、又其作物の概ねヂユウス、アポロ、ヴヱナス等神代記に遺れる神々を出づる能はざりしを思へば、敢て異とするに足らずと雖ども、抑々又これが原因たるものなかるべからず。

斫らんとするには、まづ刄を要し、縛せんとするには、まづ繩を要す。或る一定の目的の爲には又これに應ずる一定の所緣なかるべからざるものなり。日本古彫刻の多くが皆な其趣向を一にして甚だ單調なるものあるは、蓋し又これが爲にして、作者が其作物によりて權化せんとする思想の、各々皆な其軌を一にし概ね相似たるものあればなり。似たる思想の似たる形相を備へて人目に入る、また宜ならずや。

日本人は素と力自慢の人種なり。故に又その常に傲らんとするところは、實に其力にあり。露國少しく外交の巧に弄すれば、直に撃つべしといふもの、是れ日本人なり。朝鮮少しく侮慢の態度あれば、直に取るべしといふもの、是れ又日本人なり。日本人本來の氣質實に此くの如くなるを以て、その常に外人に示さんとするところの如き、其美術にあらず其工藝にも非ずして、寧ろ其兵力なりとす。

古への彫刻家、また日本人に特有なる此の性情を受けて、其作物により『麗美』の感を發揮せんとするが如きことは爲さず、たゞ偏に『力』を顯現せんと力めたるものゝ如し。稀に吉祥天技藝天又藥師の如きありて、稍々『麗美』の消息を傳へんとせるもの無きに非ずと雖ども、其多くは殺氣と闘爭の氣とに充滿せるもののみなり。觀ずや、如何に愛染明王の劍を揮つて斫らんとし、不動明王の炎々たる火中に立つかを。既に作者が力めて顯現せんとせるところ『美』に非ずして『力』にあらば、そのこれを權化するに最も便利なる形相を取るや、誠に必せり。古彫刻に十二神將の多きはこれが爲めなり。風神雷神のあるもこれが爲めなり。力士の影像の至るところに見出さる

丶も又これが爲めなり。殊に、運慶に至りて其甚しきに達せるもの丶如し。

世間はこの運慶を目して、日本彫像家の第一等人と爲すに似たりと雖ども、其所作はたゞ『力』を皮膚に浮動せしむるに止まりて、倘該作物の眞底に磅礴たる生氣と活力とを蘊蓄せるものにあらざるなり。故に、一見その活氣の潑溂たるが如きに驚歎すべしと雖ども、詳に觀照すれば其カラ元氣のみなるに啞然たらずんばあらず。京都博物館に陳列せられて運慶作と傳へたる作物の如き、皆な『露西亞討つべし。朝鮮取るべし』と意氣捲けるが如きエキスプレッションを備へざるに非ずと雖ども、又これと共に、財敗窮乏の爲め衷心大にヘコタレ居たるが如き風相を伴ひ、毅然たる慨無きを觀る。これ唯に運慶のみならず一般日本古彫刻の缺點なり。

か丶る間に立ちてか丶る弊に陷らず、徒に『力』を皮膚に浮動せしむることを爲さずして、生氣を能く其根底に蘊蓄せるは獨り奈良戒壇堂に藏せらる丶四天王中の毘沙門天と長目天とのあるのみ。これ實に『智慧』と『智識』とを權化せしものにしてソロモン傳道之書に錄されたる『智慧多ければ憤激多く、智識を增す者は憂患を增す』の消息を最も遺憾なく發露せるものなりといふを得べく、かのアンゼロ或は遠き希臘の名作も、到底これら二者の右に出づる能はざるべき乎。ミルトンにして若し其『ラレグロ』と『イルペンセロソ』とを作るの前、戒壇堂の此の二天王を觀たらんには、感興を得ること、必ずや更に一段なりしなるべし。

行基菩薩と弘法大師との作は、運慶のそれの如くしかく甚しく『ロシャ討つべし、朝鮮取るべし、されど殘念ながら軍資或は缺乏すべし』式に非ずと雖ども、覇氣の滿々たるもの自ら其間に鬱然たり。行基といひ弘法といふも皆な覇氣滿々たる政治家風の僧侶にして、山氣あり冒險氣ありしもの丶みなれば、其性情の作物に及ぶものあるは、素より云ふまでも無く、行基の手になりし觀音像の如きは其千手たり如意輪たり將た何たるを問はず、宛然たる政治家の立像或は座像にして、弘法の刀にかゝるとか傳へらる丶佛像も、概ね皆な敢爲の性に富める事業家の像を觀るが如き感ありて圓滿具足を欠くものなくんばあらず。中に就て獨り恭しく常に佛の心を宿すを忘れず、その作るところの何物たるに論なく、必ず慈

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

悲忍辱の面影を寫すに力めたるは、實に惠心僧都なり。これのみ。定朝は佛像によりて稍々『麗美』を發輝せんとするに心懸げしもの丶如しと雖ども、遂に『未來品』をのみ作り得たるに止まれりといふべきなり。鳳凰堂の大座像も又しかなり。定慶の如き却て讃するに足るべき乎。奈良博物館に出品せらるる興福寺所藏の献燈鬼は、燈と鬼との間に全然釣合を欠くを以て、その燈は必ずや後代の作なるべしと雖ども、その鬼たるや『力』詳く言へば武力を皮膚に浮動せしめずして、これを根底に蘊蓄するに於て、最も成功したるものならん乎。

また日本古彫刻の一大欠點は、腹部以下下肢一切を等閑にし、作者がこれに多大の注意を拂はざるが如きにあり。されど、古き希臘の彫像家の如きは之に反し、下肢の爲に苦勞工夫せるところ少なからざりしの感ありて、かのパーセノン殿に刻まれある神人セシウスの像の如き、特に下肢をして人目に觸るゝこと容易ならしめんとする態度にあらずや。然るに、かの運慶の諸作の如き、體の上部は總てこれを活如たらしめんとするに力め、其極闘爭の氣を浮動せしめて『ロシア討つべし朝鮮取るべし』のカラ元氣を出させ置くまでに至りながらその腹部以下に至りては、全く棄てゝ顧みざる如く、浮動せるカラ元氣だに無く、況んや素より生氣と活力の萬夫も動かす能はざるが如きものある無し。一幼孩あり、たゞその脛に觸るゝも忽ちにして倒れんとするが如き趣あること、是れ實に日本古彫刻の特徴欠點なり。これ豈にただ彫刻とのみ云はんや。

巖の陰

大塚楠緒

息せき男波は追ひかけすがり、　戀し君樣喃待てしばし、
これ程叫ぶになぜ知らぬ顏、　此處の濱べに生れもひとつ、
見そめ馴れそめつひ慕ひそめ、　居たり立つたり君故狂ふ、
八重の潮ぢの果てない思、　沖の鷗の見るめもあるを、
男らしゆない、恥かしい、　たまにや優しうこれ我方に、
砕けまんせと裳裙をひけば、
いやと女波はちよン〱ばしり、　つまづく小砂利に玉轉ばせて、
獅子のたてがみ振る樣に見えて、　泡のその樣にすぐさま消ゆる、
殿御心はわしや氣に染まぬ、　戀をせうより其處見やしやんす、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

色も花貝姿も高い、　わしか散らしたさくら貝、
拾はしやんせと歌聲まじり、　白は裳裾をさらさら、さら
ひいて失せたる巖の蔭、

ゲーテとカーライル（二）　新渡戸稲造君談話

◎其の第一は、世の中は、ヂミなものであると云ふのである。世の中と云ふものは、ヂミなもので、眞面目な奴が一番勝つものである、又強いものが一番強いものであると云ふとを教へられた。佛蘭西革命の書物を讀んでも、随分強い奴が澤山ある。どうです、ダントン。名から縁喜が惡いよーてあるが、ダントンが、斷頭臺に上つて行く所がある。デモランと二人てゆく。デモランと云ふ人は、政友會などにありそうな、氣の利いた、キリリッとした、ハイカラ的で、顔付は生白い、なか／＼の好男子、立派な人てす。ダントンは顔といつても、俠客風な奴。それで、二人が裁判所にゆく所がある其時分に、名前を聞かれると、デモランは、乃公の名はデモーランと云ふ名だ。何歳だ。三十三だ、三十三と云ふと、世界で革命をしよふと思ふものが皆な磔になる年で。ナンテ言つてる。又一方のダントンに對つて、貴樣の姓名は何と云ふか。乃公の名を知らぬか、ダントンと云ふ名は此革命でも知れて居る、貴樣は知らぬのか。住所は何處だ。住處は、地球が住處だ、モウ少して首が失くなれば、乃公の住處は歴史に遺るばかりだ。ナンゾと愉快なよとを言つて居る。さうかと言つて愈々斷頭臺に登つて行く時分に、流石のデモランも細君が來て歎いたら、ベソ／＼泣出した、ダントンが、泣くな／＼我慢して居ろ、と言つて慰めて居る、で愈々別れる時分に、是で別れだぞ、今度逢ふ時分は斷頭臺の處で首が逢ふのだ、なあんて言つて居る。それでダントンが登る時分などに始めて泣出して、ア、我が女房、我が女房と言つて泣いて居る。と云ふと直ぐに、ナニ、ダントンが斯んな弱いことで何うするか。と言つて臺に登つて首をストーンとやられる所があるが、あゝ云ふ所の其強さ加減と云ふものはカーライルに限る。又ダントンが宮中の使を叱る所などは實に愉快であるデ是等は皆カーライルの筆の勢が強いのではなく、人間其者がさう云ふ人てあつたのである、てあるから私はサートル、

リサータスを讀んでもそうです、強い所が澤山ある、此世の中を渡るに何をグズ〱して這ふやうにして渡るか、昔の希臘の哲學者ゼーノーは、世の中の艱難辛苦を足の下に蹈んで渡つたぢやないか、と叱り付けてからに、今日はゼーノーよりも一層高尚な教を受けて居る、世の中の艱難辛苦を自分の肩に背負つて尚ほ喜んで世の中を渡ることが出來る、と言ふ所は非常に強い。又所に依つては極く柔和な所がある、ちよつとカーライルを見ると、如何にも柔かい所は無いやうであるけれども、能く味つて見ると非常に柔しい所である、併し今日動もすれば基督の教などには、愛とか何とか言つてベタベタになつて柔かい奴がある、無暗に世の中は涙々と言つて泣文學なんと云ふのがある、けれども唯さう目茶苦茶に柔くつては駄目です。人が艱難してベソを掻くのを止めて勵まして遣らなければならぬ、それが今日は動もすれば缺けて居る所謂基督の教は強い所が失くなつて無暗に柔くなる傾がある、デ今日は其反對と言ふと如何か知らぬが、兎に角それを抑へる爲めには、此カーライルの著述は大變に助けがあると思ふ、同情と云ふことは宜しい、けれども唯ベソを掻いて居

つたばかりでは仕方がない、乃公は斯う云ふ決心である斯いふ事をするのであるゾと云ふことを世間に發表する、さうすると傍から邪魔をする者は蹴飛して行け、二三人蹴飛ばせば後の者は自から退いて仕舞ふ、さうして大きな兩手を振つて世の中を渡らうぢやないか、斯う云ふやうに教へてある。是は私の誤解であるかは知らぬが、私はさう思つて居る、であるからして私が此カーライルで第一に學んだことは、世の中を渡るに、所謂今日のやうな才子風では通らない、大變ジミなものである、眞面目な考を以て強く世の中を渡らなければならぬ、唯泣いて居るばかりでは往けない、何でも屈しないで勇氣を持つて往かなければならぬ、と云ふとを頗る習つた

◎それからモー一つカーライルに習つたことがある、それは**理想と實在と云ふ區別が段々薄くなつて來た**。私がカーライルて學んだことは、其理想の中に實在なるものが含んで居る又實在と云ふ中に理想が含んで居ると云ふことである。理想と云ふものは必ず自分が實際にやつて見なければ、本當の眞味が分らないと云ふことを教へると同時に、どんな實在でも其中に理想が含んで居ると云ふのである。例へば手を擧げる

此手を擧げると云ふことは何でもないが、併し手を擧げたり下げたりするに就いて、細かに考へて見れば、此地球の中心が其通りに動いて居る、地球の表面に吾々が居るので、上に異動があれば其中心は動いて居る、どんな小さい物でも一寸動いたならば地球の中心は直に動いて居る、さう考へた日には大變な大きなものである。そう云ふもので、吾々の擧動はどんな些細なことでも、其中に非常な理屈を含んで居る、であるからルイヤールの中のアイデヤールと謂ふべきと同時に其理想々々と謂ふて居る所のものが行に現れなければ分るものぢやない。

◎それからモウ一つカーライルが私に教へたことを申上げませう、それは人の貴ぶべきことはキャラクターにある、人の藝と云ひ品行でも、キャラクターに比べて見れば些細なものであると習つたやうに覺えて居る、と云ふのは、是は青年諸君が誤解のないやうに願ひたいが、品行の方正と云ふことは素より必要なことである、けれども唯品行方正ばかりに八釜しく言ふと、其根本を忘れることが往々ある、と言ふのは人に依つては世間に、極く卑い動機から品行を方正にして居ることが出來る、マア酒飲は別に品行方正云々と云ふこともない、又遊廓に遊ぶことを例に取つても、或人が遊廓に遊ぶとあの人は品行方正ぢやないと言ふ、又或人は遊廓に行かない所で其人は方正かと云ふと、それは其點だけは方正であらうけれども何故に行かないかと云ふことを質して見ると、錢が無くつて行かない、それでは方正と云ふ譯に往かない、又中には、行つても宜いがどうも親父が睨付けて居るから行かない、さう云ふのもある、又甚だしきは、どうも上官がやかましい人だから知れるとならぬから行かぬゾ、と言ふのがある、して見ると此品行方正と云ふことは余り當てにならないものである、動機と云ふものと、出て來る所の行と云ふことゝ反對のことがある、又極く吝嗇な奴がモウ一層金儲をしやうと思つて、それが爲めに殊更に寛大にやることがある、其人の動機を知らない者は、あの人は寛大な人であると思ふだらうが、併し其人の精神はモウ一層金儲をしやうと云ふ考でやるのであるから、矢張り吝嗇であると云ふやうな具合で品行といふことばかりを見て居つて、動機と云ふことを見ないと、どうしても其人の値は分らないものです、そこでカー

ライルの著述を見ても、今までは甚だ品行の良くない人で、意味に於て最も大きい、道徳上良くない人であると云ふものを、カーライルは大變譽めて居る、例へばクロムウエル程の惡黨はない、如何にも惡黨のやうに言つてあるが、カーライルは筆を盡して、クロムウエルはさう云ふ人ぢやないと云ふことを言ふ、それて近頃は初めて、成程クロムウエルは本當の豪傑であるといふことが分つて來て、又善人であると云ふまで分つた、今日カーライルの説が一般に行はれて、クロムウエルと云ふ人は豪い人であると云ふことが大分に分つたやうである。又佛蘭西革命を見ても、ロベスピアと云ふ人は品行方正で、どんな誘惑に陷つても迷はない人である、殊に眞直な人であると言つてあるが、彼のロベスピアを、カーライルの考では、どうですか、マア其惡口の言ひやうと云ふものは言葉を極めて居る、ヒヨロ〳〵した瘠ッぽち、ロベスと云ふ者は何だ、物の分らない奴であると言つて、形なしに言つた、死ぬる時まで碌な死樣はしないと言つたが、ペストか何かをやつて、塵を運ぶ車の上に載せられて、車から半分出て居つた、成程死ぬときなどは實にダントンなどに比して雲泥

の違ひだ、ロベスピアの如きは實に卑しむべきに言つて居る、けれども品行甚だ方正に極つて居る。それに反してメラボーは、あんな箆棒はない、人の金なら自分の物だと思つて居る、又自分の金を自分の金と思つて居ない、其代り自分がなければ人の物でも持つて行て仕舞ふ、さうして金なら兎に角だが、人の女房まで彼方此方引張つて歩いたりする、牢から出て來ると大きな顏をしてナーニ平氣で居る、どうもあの人は法律にも何にも合はない人だ、さうして蛙のやうな大きな面て、而も痘斑面た、どうして他人の奧さんを引ッ張つて歩るけるかと思ふやうだ、それに皮膚でも何でも見る影もない、けれども此メラボーにして品行方正であつたならば、佛蘭西革命は無くつて濟んだらうと私は思ふ、矢張り品行方正といふことは怠るべからざることである、併し又方正と云ふこと〻、又一方に於ては品格と云ふことを重んじなければならぬ、品行方正ばかりで往けるものではない、もつと其品行方正の奧がなければならぬ、品行方正と云ふのは則ち門てある、併し奧がズッと清潔になつて居ないと往けない、所が此ロベスピアと云ふ者は門構が宜くつて奧は甚だ穢ない、メラ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ボーの方は奥がチャンと備はつて居つて、其代り門の前は塵だの肥槽がある、であるから品行方正は宜いけれども、それが爲めに人間が小さくなつては往けない、誰は女郎買をするからモウ迚も往けない濟度すべからざる者である、何の誰は酒を飲んだ、酒なんぞ飲んでは何うしても往けない、と云ふやうに動もすると小さなものになつて仕舞ふ、デ私がカーライルに學んだことはそんなものぢやない、奥が正しければ品行方正は本當の品行方正である。

◎それでカーライルは、今お話したやうな教を人に與へた位の人物で、啻にそれが自分の思想のみならず、今日の社會にも其思想を現はしたが、抑も何處からさう云ふインスピレシヨンを得たかと云ふと、それは胃弱であつたけれども頭が非常に宜かつた、數學なんぞも最もやつた人であつた、けれども矢張り吾々と同じことに青年の時分には大變に鬱氣になつて、いろ〳〵迷つたことがあつたのである、さうして迷つて居つて、向ふに行つては糧を求め、こつちに來ては藥を求めるやうにして、其内に此ゲーテの名をちよつと聞いた、さうして讀んだ所が、丁度私がカーライルに於ける如く、唯段は違ふけれども兎に角同じやうな理由で非常にゲーテを信用した、ゲーテに初めてやつた手紙などは非常に面白い、神さん見たやうに言つてある、自分等の手紙を出版される積りで書いたかどうか知らぬが、兎も角も一個人から一個人にやる手紙で大變面白いのがある、例へばカーライルがゲーテに初めてやつた手紙に斯ふ云ふことがある、私は職が無くつて困つて居る、所が何處かの大學で物理學か數學の教師が要ると云ふので、それは候補者があつたけれども、それは往けなくなつた、それで今度は文學とか哲學とか倫理とかの講坐の人が欲しいと云ふので、私は其候補者に出たが、此に於て貴君から一言の御手紙があつて、カーライルといふものはなか〳〵出來ると云ふことを言つて下さると、私は大變好都合で飯に有付くのであるから、どうか宜しく願ひますと云ふやうな、そんなやうなことを言つてある、又ゲーテから小さい包をやると、あなたの包が郵便で來たから、今それを開けやうと思つて、前に包の上から研究して見て居ると大變體裁よく結んであるが、此結んだ人は誰であらう、定めて貴君の奥さんの手に成つたのであらう、それを思へば之を解くのは殘念であ

る、なんて大變に優しいことを言つて居る、誠に見て居ても愉快である、さうすると又ゲーテの方では、自分の弟子にやるやうなことを書いて居るかと思へば、今度は頻りに尊んでからに、英吉利に私の思想が分るやうな人があるのは誠に滿足だとか言つて居る、デ此カーライルは其通りにして初めて自分の師匠とも稱すべき所のゲーテを得た、それから此ゲーテの品行といふことに就いては、どうも面白くないことが澤山ある、獨逸の書物にあるが、頗る多情の人であつたと云ふことが書いてある、又ビスキンセスアンドゲーテと云ふ本があるが、それを一讀して見たが子供からゲーテに送ると云ふことがある、實にどうも口に出せないやうなことが書いてあるそれから又ゲーテが死んだ後で、死んだ人にやる手紙を書いてある、「オヽ〳〵天に在ますゲーテが」なんて、非常なことが書いてある、デあの人は品行方正と云ふことは言へない、且又あの人は傲慢です、さうして、此人の家は誠に裕かで金は有つたし、さうして貴族です、さうして學問は出來る、其學問、哲學とか何とか云ふやうに極つて居ない、物理學、文學、或は博物學などゝいろ〳〵出來る、フランスコートのゲーテの家に行つても、今でもやつて居るが、鑛物學植物學のやうなものも發明がある、それで政治家であつて總理大臣をしたことがある、そうして美術に於ても、自分で彫刻した物が今でも遺つて居る、或は畫も書いた、なか〳〵多藝の人であつた、デ斯う云ふやうに金も有り學問も何でも出來るし、さうして位も有り權力も有り、それに美男子であつた、それで極く堅固な人である、サアどうもカーライルとは大變に違ふ、先づ世の中にはあの位備はつた人は少ないと思ふ、けれども今言つた通り、品行といふ點に於ては決して備はつた人ぢやない、それでカーライルは、謂はゞさういふ小さい所に氣を着けないで、是は豪い奴だと思つた百五十年以來ゲーテに及ぶ人はない、先つあの人は此世を治めて居る者である、人間の思想を治めて居るのはゲーテである、けれども今ゲーテの事を居つても分らない人があるから今は言はない、などゝ豪いことを言つて居る、さうかと云ふと、カーライルの日記に書いてあるのを見ても、アンタイヤルと云ふ本を譯す時分に、是は非常に高尙なことがある、實に神かと思ふ、天の使かと思ふと言つて居る、所が次の文章に來てからは非常なこ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

とがあつてからに、今度は本を蹈付けて、こんなものは再び譯さぬと言つて蹈んだと云ふことが書いてある、それで先づ私共は甚だ面目ないけれども、ゲーテの批評は迚も出來ない、三十以上にならなければゲーテは分らないと言はれてあるが、私は四十になつても未だシラーが宜いやうな心持がする、此事を一昨年獨逸の文學者に話をしたことがある、どうもカーライルは斯う云ふことを言つたが、どうも何時まで經つても三十以上になつてもハツキリしないと言ふと、所が先生大きに慰めて吳れた、それは失望しないでも宜い、四十が五十になつても構はない、一躰シラーの方が性質がよいのであるが、唯シラーは早く死に、さうして多藝ぢやない、けれども其思想の品格を比べると、シラーの方が優つて居る、唯シラーは非常に高尙にヒユーツと立つて居るから、非常に高いので讀み難いのであるが、ゲーテは自然の山のやうになつて居るから登り易いやうになつて居ると言つた、デ今申す通り品行も治まらぬだけに、此世の中の俗な所はシラーよりは確に感じて居つた、何とか謂ふシラーの詩があつた「河があつて向ふに我が理想がある、之れを渡らうとするが船がない」と言つて歎く所があるが、あれはシラーの理想の高い所を示したのである、即ち自分の理想の非常に高いのを有つて居つたからである、ゲーテは餘程俗であつたからして世の中の人は、ゲーテの方に登り易くなつたのである、富士の山よりもつと登り易くなつて居る、絕壁でない、それで其獨逸人の言ふには、そんなに心配しないでも、獨逸人でも未だシラーを崇拜して居る人が澤山あると言て慰めたが、先づ普通一般には、シラーよりはゲーテと云ふやうである、カーライルに言はせると、ゲーテは獨り十九世紀のみならず、十七世紀十八世紀と、斯う三代に跨がつて是ほどの人はない、或は二十世紀に這入るかも知れぬが、マア此三百年はゲーテ程の人はないと言ふのである、何故かと言ふと、此世の中を見ること、つまりジミに見て、浮いたヒヨロ〳〵したものでない如くに、物を見ても小さい物でも意味がある、其内には謂はゞ神の働きがあると云ふことを敎へたものである。尤も是は耶蘇敎の神とは違つて居るかも知れぬ、御承知の通り或人が行つてヲツトマーンの手紙か何かにあつたが基督の話になつた所が、基督の傳は神聖にして語るべからざるものであると言つ

て、言はなかつたさうである、さうして神の堂と云つて、人間の心の艱難苦勞と云ふことを、彼處に表はしたものであると云ふことを言つて、此御堂の扉は漫りに開くべきものでないと云ふことを言つて居る、隨つて此神と云ふことに就いては、基督教のとは大分違つて居るかのやうに思はれる、それで兎に角に吾々は好才子的にヒヨロ〳〵やつてからに通れるものでない、眞面目にやらなければならぬと云ふことは分る、あの人の名言です、又己を殺して初めて生命といふものが出來るものである、己の爲めに出來て居る、己の身を捨てて人間と云ふものは生くるものである、極く眞面目な敎ですさう云ふやうに世の中が出來て居る、世界がさう出來て居る、それで世界と個人の間の調和が取れると云ふものは、道德の法を破らずに、世界の法則に適ふやうにして行く、其法則に適ふには、それは今一々申した日には限りがないが、大躰は先づ此世の中と云ふものは神のデパインアイデヤがあるものである、それを見ずにヒヨロ〳〵行つても往けないと言ふのである、ですから小說を見ても、あの人の本を讀んでも、隨分穢ないことがあるなと思つて、ズツト讀んでから本を伏せて見ると、此世の中がズツト廣くなつたやうな氣がする、殊に私はゲーテの本は澤山讀まないが、隨分怪しいと思ふことが屢々ある、實に惡漢が出て來たり、或は魔法遣ひ見たやうな者が出て來たり、甚だ面白くないと思ふことがあるけれども、又狹い意味に於ての品行と云ふ上に於ては、兎に角讀んで伏せた時分には、外の人はいざ知らず、私は心持がズツト廣くなつたやうな氣がする、成程人生と云ふものは斯う云ふものか知らんと思ふ、それで先づ人生と云ふものは貴いものである、詰らない奴でも、生れて居るものは乞食同然な賤しい者でも、矢張り是は人間である、斯樣に尊んでそれて始めて世の中の調和が出來るナ、と云ふやうに寛大になるのが此人の敎訓であると思ふ。(完)。

花子のなげき（二）

故中島湘煙女史遺稿

平日は餘り往來もせぬ親族身內寄り集ひて何くれとなき世話に家衰微したりとはいへ流石は舊門なりと村人等の驚くまで立派なる儀式に野邊の送りもすませたりあのうつくしき妻君

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に訣れ玉ひし心の中はいかばかり殊に子女の世話男の手にては届くまじ否々又若き新人迎へ玉はゞ却て春に逢ふ心地も爲し玉ふならん抔人の悲しみを酌まんともせず嘲り半分の悔みを爲す實に人情は紙の如し人情が薄きか厚きかは心に研究するの餘地もなく耳あれど目あれど聽くに心なく視るに意なければなり病不治之症なりと定り懷ろの珠終には人手に渡さねばならぬ一大恨事日ならず來るかとおもひし時は雙眼の涙容赦なく湧き來り病妻が眠て覺めざるとき看護夫が去て居らぬ間遠慮なく會釋啼き盡くしたきがせめての慰さめにてありしが今は悲しみ極て涙出ず只考ふる事もなきを人なき窓に考へて暮すが慰さみといふにもあらぬ慰藉と爲りし花子の父には家の傾かんとする位には何の頓着もなき筈われの天地は既に崩れん心地すればなりこれ幸親族等はこの機失ふべからずとて數代以前より斧入れぬ山林惜しげもなく切り倒しては賣り賣りては切り瞬く間に火の手は既に實宅にまで及びたりいかなる善人の主人なりとも此一事には爭て膽の潰れざる外に所有の山林田畑も少なからぬにといへば

さては御許妻を失ひし悲しみに氣も狂ひたるか御身が財產は幾千ありて借金は幾千あるといふ事を知り玉はぬか御身が妻君病みて四ヶ月間日に積りて三四の百二十日雇ひ切りの看護婦それのみにては淋しきとて年增の下女に雜婢一人これはかりにても少なからぬ入費に見舞人の旅宿と定めし澤文の拂ひ每日は來ぬやうなれど併せて見れば大したもの葬式にしてもこれ程盛んなるは今迄見ぬと村人等の驚きを以て見ても其費途の多かりしは知るべきにあらずやされど御身は腑に落玉ふまじ病氣以來の入費如何に多くとも古池に水絕えずの譬村中に肩の幷ぶべきものなき大家半年や一年に現在住む家まで賣らねばならぬ筈のとおもひ玉ふなるべしそこは御身が餘りの人よしにかの怜悧なる妻君へ經濟萬事を任かせ過ぎた結果死人に口なしいはずもがなといひ玉ふならばいはぬ迄の事縱然ひ御身に覺えなき事といひ玉ふとも現在其實印を以て登記を經て抵當に入れし山林期限が來れば返すか渡すかの外はなかろうじやないか元來あの妻君をむかへ玉ふとき親類等がいはぬ事かサーサさうゆう事われ〳〵もいひたくはないけれど親類等が共謀して不爲めをやるかのやうなる顏付し玉ふものからいひたくもなき事迄もいはねば事が分らぬからと

又してもわれには中分なかりし妻の事此世にあるならば忍びもせん今は辯疏せんにも其甲斐なきことをいはるゝがつらければ何事も宿世の縁なりとあきらめ親類がいふまゝなる更に人よしの名を實行せねばならぬ事とはなれり何事も宿世の縁と悟るとはいへ素より鍛錬を積みて得たる悟りにあらずしていはゞ意氣地なしの極度已むを得ずしての悟りなれば忽ち有邪無邪の忘想に攪されて何の効力もなし口に出さぬ瞋恚の焔らに身を焦かれ亡妻の一週忌に間もなしといふ翌年の七月半はこれも亦なき人の數にかぞへらるゝ事とはなれり、年忌をとふとはよく／＼の縁定て蓮台に三月雛を氣取るならん抔と縫揚げの狹き肩にも親ありてこそ廣く渡れる小供等が孤となりし憐れさを憐れとも思はぬにくまれ口實に腹たゝしの世の中なり。

花子と弟の由二は其血縁の深からぬ叔父が家に引とられたり花子が家は冬の尾花と散り果ると同時に今迄は名もなき草春風に誘はれて繁華の色を染出す俄か大盡の家三四戸も村に聳えたるは不思議なりと呟やくものも多かりしとか。

宇宙と人生及靈魂に就て（其二）

黒岩周六君演説

或人間は赤い着物を着て後から鞭を食はされて腰に鐵の鎖をつけて働き、仕事をして居る、一個人を考へると是は何の爲にあんな事をして居るのか分りませぬけれども、社會と云ふ意味を考へると、社會の安寧の爲に懲役人となつて居る囚人であると云ふ事が分る、彼ば何故に斯の如き詰らない事をするかと云ふと、社會の大極の力で小極をあのやうな工合に使つて行く、戰場に出る兵隊の如きものでも、社會とか國家とか云ふ大極の方を見なかつたならば兵隊のする事は合點が行かない、或兵隊の如きは戰場へ出て彈丸が中つて倒れて、自分の死ぬと云ふ時に萬歳とか天皇陛下萬歳とか嬉しい聲を出して死ぬるのは、若し國家と云ふ大極を認めずして兵隊と云ふ一の小極を見て考へた日には此兵隊は狂人だ、併し大極に就て見ると決して狂人ぢやない、立派なる名譽の心ある愛國の心もあつて、大極の爲に彼は犠牲となつて居るので、大極を認めなければ小極の働きを認めることは出來ない、それと同じく物質を研究するに就きましても、宇宙と云ふ一の大なる大極の力を認めないては、幾ら物質を研究したつて分るものぢやない。

今迄の物質論者は詰り化學或は理學と云ふ學問を以て、化學の方では物質を分拆しく／＼とう／＼、エレメントと云ふ原子と云ふもの迄分析して仕舞つた、理學の方では小さく碎き／＼／＼アトムス、極微分子と云ふものまで說明して仕舞つた、それで今迄の化學理學などを學ぶ人は是で以て物質の根源は分つたものだと斯う考へて居るのであります、けれどもどうしても此原素と云ひ分子と云ふ其小極の議論から分らない事がありますのは人間の命である、此分子と云ひ原素と云ふものがどうして、此人間の命になるか、是はどうしても學者が說明するとが出來ない事で、今迄この唯物論者と云ふものがありまして、是等は何でももう其物質の一番もとの原子、或は物質の一番もとのアトムスと云ふものを能く詮索すれば、それからして人間と云ふ生物が起つて來るに相違ない、起つて來さうだと云ふことを言ひまして、もう宇宙には物質の外に何にも無いやうに考へる、成程何にも無いと

した所で總躰に大極と云ふものがある、其大極を認めない日には、物質が何故に人間の生命になるかと云ふことは是は到底分ることぢやない、それで今日に到りまして此物質論と云ふものは一歩進歩をして、物質的一元論、斯うなつたのでありまず、物質は何かと云へば則ち物質の分子と云ひ原素と云ふ小極と、宇宙の大極と二つを合せて一つとなつて來て、然る後に始めて此物質の働きと云ふものが分る、物質が大極から動かされると云ふものはどう云ふことであるかと申しますと、凡そ物質はどのやうな物であつても矢張り宇宙の一部分であつて獨立はして居ない例へば此コツプに何匁と云ふ重さがあると致します、此重さがコツプの重さかと言ひますとコツプの重さぢやない、地球が引く重さである、地球が引く重さであると致しますと云ふと、之を赤道の中へ持つて行くと此コツプが輕くならな、ければならぬ、地球は赤道に於て最も速く廻つて居るから刎飛す力がひどい、引付ける力も無論あるが刎飛す力が多い、獨樂を廻して見ると獨樂の廻りは他の物を刎飛す力がある、而して中心へ行くと其力が無い、詰り北極とか南極とかへ行けば刎飛す力が少い、それですから北極へ之を持つて行くと刎飛す力が少いから重くなる、赤道へ持つて行くと輕くなる、それはどうして量るかと云ふに天秤へ掛けたんぢやア分らない、天秤の棒も輕くなれは重りも皆輕くなるから、矢張り一匁の物は一匁になりますれども、それを量るには違つたごく麁末な秤がある、金の針線で渦卷のやうに拵えて、其渦卷を引張るやうになつたのがありますが、それでかけて見ると分る、針線の伸縮の力は同じことでございますから、赤道の上へ行くと螺旋が縮つて仕舞ふ、北極へ持つて行くと伸びて仕舞ふ、なぜ縮むかと云へは輕いから縮む斯う云ふやうな事で一つの重さでも其物の重さではない、宇宙との關係との重さである、宇宙との關係に何等の意味もないやうでありますが、私が此處に立つて居やうとしても宇宙なるものが引付けるから立つて居るけれども、若し之を引付けなかつたならば風に飛んで何處かへ行つて仕舞ふ、故に物の力と云ふものは宇宙全躰から打算しなければ分らない。

然るに今迄の化學者、理學者、殊に其中にも生物學者と云ふものは、物質の力を以て一切を說明することが出來ると信じて、化學の作用を以て人間の——人間のみならす生物の命を拵えて見たいと云ふ斯う云ふ謀叛を起した、凡そ世の中に學者の企てた事柄で是程の大膽な事柄はない、私共から申しますれば、生物を拵えるのは造化の力で、宇宙總躰にある小極の力でないと云ふ、是は化學者理學者などは信じなかつた、其中にも生物學者は一番初めに人間に限らない生物の命は何であるかと云ふことを說明し、英國のハクスレーでございますか、ハクスレーがプロトプラズムと云ふもの即ち炭素窒素などゝ云ふ此抱合の蛋白の物、是は生類の命の本と云ふべきもの、それを發見しました時に、愈々化學の力で人間の命の本を見當てた所が何でもプロトプラズムである、原形質である、原形質を造れば造ることが出來ると云ふので、化學者は汲々として其試驗に取掛つた、果して其蛋白質の原形が出來るか否や、其込入つたことは此處で說明することは出來ませぬが、兎にも角にも或一種の粘い液躰であるから、考へて見るとどうしても化學の力で出來るに違ひないと、世界の化學者は一生懸命に之を拵えることを考へた、いろ〳〵考えましたけれどもどうして出來ない、先づ近來物を拵える化學の力が電氣作用に依て進步したことは非常なものであつて、大抵の物は殆ど化學で拵えて仕舞ふけれども、プロトプラズムばかり出來ない、蛋白質すらも出來ないのでありまず、今の化學の力は殆ど農業を無用にする位ゐ發達したと稱されて居つて、人間の食ふ物を化學の力で拵えると云つて居つたが、蛋白質なるものが出來ない、蛋白質が出來ないのでありますからもう一層進步した原形質に至つては迚も出來やう筈はない、此後何十年の進步に依て或は拵えるかも知れませぬけれども、拵えた所が本當のプロトプラズムではない、原形質とは言はれない。私は本當の原形質とはどう云ふものであるかと云ふことを諸君に考へて頂きたい、本當の原形質は人間なり他の生物なり命のあるものには是たけの物が無くちやいけない、唯其化學的の分合に依て其調合の仕方が同じいのではない、其命の本と云ふものはそれ自らがどうかして活きやう〳〵と云ふだけの、活きるだけの自働をして行かなければならない、活きた上に食物を自分の躰へ入れそれを消化する力をも持つて居なければならない、それからして又自分の後とへ自分に能く肖た子を遺すだけの力は持つて居なければならぬ、化學の力に依て生物の精分に同じ汁を化學者が拵えたにした所が、命を持つて生存競爭を爲して自分の子孫を繁殖すると云ふうなそんな不思議な力を添へることがどうして人間の力で出來る、若しも是が出

來ると云ふならば進化を來つたと云ふのでありますけれども、化學が幾ら進歩した所が到底出來る事でない。

それであるから生命即ちライフと云ふものが今の社會に於ては一つの不思議、時の不思議處の不思議と共に三大不思議となつた、空間に廣い處は涯りなく想像することは出來ない、時間の長いこと、年限の長いことは想像することは出來ないそれと共に生類の命に不思議なことは是はどうしても人間には想像することが出來ない、此三つはどれ程學術が進んでも說き明すことが出來ない、今日說明し得て居る上に一歩も進む見込がないと云ふのが今日の學問の有樣であります、それで其化學者及び生物學者がライフと云ふことを煎じ詰めて、さうして最後に下した斷案は何であるかと云ふと斯う云ふ斷案を下して居る、凡そ命と云ふものは前代の命より生ずる外は決して生ずるものではない、斯う云ふ斷案になつた、前代の命とは何であるか、詰り親と云ふ者、親の腹から生れて來るより外に命と云ふものは決して其他から出て來るものではない、斯う云ふ斷案に達した、最も進歩したる學者のチーゲルでもヘッケルでも此說にばかりは服從して居る、親の命から來るより何處からも來る處はない、斯う斷定するより外に道はない所が私は諸君と共に此斷定を少し考へて見なければならぬ、斯樣な斷定が果して事實であるか、人間の命と云ふものは――生物の命と云ふものは親の命より來るより外來る處がないものであるか、若し之をないものと致しますれば大變が差支が起つて來る、と云ふものは此地球なり、此天體總體なるものは今より幾千年か知りませぬけれども、兎にも角にも非常に熱い火の固りであつた、まるで以て物質界のやうな形をせずして非常な熱を以て溶けて、流動體のみならずそれよりも熱くつて蒸發氣となつて空中を舞つて居たものである、其熱さたるや吾々が飛込めば直ちに消滅して仕舞ふ、其樣な熱い中に生類を產出す親の命と云ふものが籠つて居ることが出來ませうか、是は決して出來る事ではない、それで先づ百度二百度と云ふ熱になつてすらも生類の卵にしろ何にしろ悉く死んで仕舞ふ、盡きて仕舞ふ、然るに其生類の精と云ふものが昔の非常なる熱い世界に、悉く蒸發氣になつて居るやうな其熱い中に、生類の命と云ふものがどうして在得たか、是は在得たと云ふことは言いませぬ、命と云ふものは無かつた、活きたものは一つも無かつた、それから其天體が冷固つて或溫度に達した時に生物が出來たには違ひない、さうしますと其生と云ふものは何故にそれが親から生れたと云ふことが言へませう、若し親があるとしても其前の親又其親を尋ね段々と尋れて行けば何處かに親の無い時代があつたに違ひない、親の無いのに生れ出たと云ふ時代があつたに違ひない、然らばどこから其命が來たか、是是が今の化學者がどうしても返事の出來ない所で、彼等は命は親の命から來ると云ふけれども、兎に角昔親の無い時代がある、一番始めの生物と云ふものは親から生れたものでは決してない筈なければ親が無かつた、さうすると何から出來たか、今の學者がどのやうにした所が、藥物のやうなものを造る所でない天然に涌いたので、それがどう云ふ次第で涌たかと云へば是が大極の力でなければ出來ない、物質を持つて來て物質の小極の力では命と云ふものは出來ないけれども、是に大極の力が加はつて大極の大なる天然の宇宙と云ふ化學鍋で攪混ぜた日には、親から生ずるでなく、物質から命が出て來る、即ち命を出すには大極の力で物質の小極の力ではない、若し今の社會に於きまして此世界をば、太陽から月から一切箱の中へ入れて仕舞つて、其以外との交通を絕つて其中で火を燃したならば、それは天躰の中に住んで居る動物は皆死んで仕舞つて、それきり再び得られることはない、それは消毒をして一つの壜の中虫が涌かないと同じことで、大なる何かの箱へ天躰を入れたら、それは其中へは動物は生じない、消毒して仕舞つたならば一匹の虫も生じない併ながら箱詰にせずして限りなき大きな宇宙と交通をせしめて置たならば、宇宙の限りなき力で何處かへ生物を生ずる、それは何で分るかと云へば我が地球に生物の生じたのが何よりの證據でありますから、是だけに依て兎も角も宇宙大極の力と云ふものは物質小極の力の及ばない事を爲して行くと云ふことを考へるより外仕樣がない、詰り吾々斷定は宇宙の大極の上には物質の小極に存するよりも以上の力があることを認める是は私の確かに認める、私が認めるのみならず世界の進歩したる化學世界の進歩したる哲學、世界の進歩したる宗教、即ちパンセーズムと云ふ者が之を認めて居るのでございます、さう致しまするど兎に角宇宙の力で以て世の中に生物が出來ると云ふことはもう是で分つたものと致しまして、此生物がどう云ふ形に於て現はれて來るか、又吾々のライフと云ふものが――生と云ふものがどのやうな

事に支へて居られるかと云ふことを一言して於きまして、それから其次に宇宙の——人間で言へば靈魂、宇宙の何だか知りませぬけれども、或力と云ふことに論及したいと思つて居りますが、少し時を經ましたけれどももう少し私は述べさして頂きたいと思ふ。

時事

○天候佳良

天候佳良に復し、米作豐稔の見込あるに、東北の一部は又亦凶災に罹れり。嗚呼、東北、近年何んぞ不幸なるや。惟んみるに、之れ其の生活難を徹底せしめ、其の惰眠を破り、其團結を緊切にして其同情を敏活にするの天警にあらざる乎。たとひ若し然らずとするも、人は以て斯の如き善福の事に轉化せしめざるべからざる也。

○動物虐待防止會

府下に動物虐待防止會起れり、吾人の欣賀する所也。而して一方には飼犬の事、極めて面倒になり、人之を棄てて爲に撲殺せらるるもの甚だ多し。

○英學熱

英學者の隆多なる、前古未曾有とす。一個人の私立にして、且つ殆んど一個人によつて教えらるるとも云ふべき正則英語學校の如き就學生一萬人に超ゆ。

○演說會

啻に演說の盛んなるのみならず、演說會は必らず入場料を取る。入場料なき演說會には、反つて來聽者なきもあり、其の價少なからんと思ふによる也。而して府下に於る入場料は、尤とも廉なる五錢にして、尤とも高きは二十錢以上に上る。

○名古屋の女學

名古屋の婦女は令聞あるものにあらざりき、其の女學は極めて振はざるものなりき。然るに近時の豹變や、眞に驚ろくべき也。記者近頃、事を以て同地に遊び、高等女學校長市守謹吾氏を訪ふて該地の形勢を聞くに、市内上流の家、其娘子を

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

敎へざるを耻ぢ、競つて高等女學校に入門せしむるもの年々激增す。而して、卒業の女生亦太はだ好成績にして、絕えて所云ゆる名古屋女の舊風を存せず、同窓相約して長く同もに切磋するの氣慨壯んなりと云ふべし。市守氏は、女學雜誌創業以來の舊友にして同氏が斯學に熱實なる二十餘年の經歷たり。其の激勵に出るの尠なからざる素より明かなりと雖ども女界大勢の推移する所、亦之によつて察すべし。

○江戸城明渡

曩には川上、今は井伊。自から勝麟太郎に扮して、江戸城明け渡しの劇を演ず。嗚呼、千代田の讓與と、海舟先生の人格とは、最早既に劇中に入らんとする也。

○婦人の外部運動

婦人矯風會、婦人衞生會、婦人敎育會等は、婦人會中の先輩にして亦殆んど白眉なり。然れども、此等は皆な、婦人外面の運動に大故障ありし時代に生れし也。近時、愛國婦人會忽如として出現し、俄然勃興し、如今既に天下を席捲するに至り、貴婦人外部の奔走に慣れて、女界運動の自由一變せり。惟ふに慈善事業に於る婦人の勢力は、四年前の時人が夢にだに想念すると能はざりし所なり。

○柳澤女史歸朝

米國に留學すると二十年。蓋し津田孃と同もに、日本女學生にして留學すると最とも久しかりし人の一人たる柳澤女史子は、去月三ヶの學位を負ひ、質實なる錦衣を着て、無恙歸朝せられたり。

○渡米倶樂部

渡米者の爲に總べての紹介と便利とを與へんとする有益なる設計は、今や反つて女性の手によりて成立せられんとするなり。

樂友社同人著

◎◎◎◎五版發賣

名媛唱歌

袖珍洋裝頗美本
實價金二十錢
郵稅不要

○華族女學校學監下田歌子女史序文
○女子英學塾長　津田梅子女史序文

容內山歌

○神功皇后　○加賀千代　○春日局
○松下禪師　○山内一豐妻　○小督局
○紫式部　○淸少納言　○辨内侍
○瀧岡局　○大政所
○女學生　○靜御前

◎◎◎◎再版發賣

東京音樂學校講師高折周一先生作曲
音樂之友編輯主任今村九穗先生作歌

國民唱歌 **海國男兒**

一册三錢
五十部以上二錢五厘
百部以上二錢
郵稅一册二錢五十部以下は不要

東京音樂學校講師前田久八先生作曲
東京音樂學校講師旗野十郎先生作歌

歷史唱歌 **扇の的**

目下製版中

發行所　東京市下谷區徒士町三丁目七十二番地　樂友社

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂

故若松賤子女史譯述

第九版

小公子

全一册洋裝美本紙數三百五十頁正定金卅五錢郵稅八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇塲に演ぜらるゝと數十百回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一小年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行悉て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。此書初て世に公にせらるゝや、譯文の巧妙を以て一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀曉に徹し遂に卷を釋る能はざりしと云へり。英學新報又云ふ世の英文和譯を學ばんとするもの之に優るの餘師なしと同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

嚴本かし子文集

忘れ形見

洋本美裝一册六百八頁
正價一圓

目次

忘れ形見	雛嫁
せーらくろー物語	我宿の花
波のまに〳〵	いなつくあーてん
入學前	ひろひ兒
林のぬし	燒て踏
邪推	榮公の誕生日
淋しき笑	病母と小作
砂村の隱居	若物のなる木
けんつく婦	黄金機會
ろーれんす	女房演説
お向ふの誰れ	おもひて

以上

發兌元　東京堂

大賣捌　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雑誌第五百二十號
明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可

獅子身中の蟲よく之を倒す
歯の疾を一小事と油斷するなかれ
歯からして大病人となる者頗ぶる多し
歯科大醫曰く、歯の疾より、消化機能を傷なひ、胃病、腸、貧血、ヒステリー、其他種々の神經痛を起し、爲に死に至るもの算ふべからずと。
歯の疾を防ぐには善き歯磨を使へ
ライオン歯磨
ライオン歯磨
獅子印の歯磨

（明治卅六年八月廿五日發行）（毎月二回十日廿五日）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY